



心の歌を奏で て

—仮面の国—
①の①

芳田尚哉

今日は道場ではなく、外に出ていた。

街から少し離れた荒野に来ている。

「ファイ様も、雷公に慣れてこられました。そろそろ、どの程度なのか、確認させていただきます」
なんとなく想像はしてたけど、ここで雷公の力を使うのか。

「ファイ、頑張ってね」

「ああ」

いざってなると緊張する。

俺は本当に雷公の力を使えるのだろうか。

蟲(ベステート)との戦いの時は、鷹(ファルーコ)が力を貸してくれていた。だから、俺は雷公の力を使う事ができたんだ。

鷹(ファルーコ)の助力なし……。

じんわりと汗が滲む。

鼓動が速くなる。

目の前が霞む。

思考が停止する。

存在を認識できなくなる。

「ファイ様」

「ファイ」

二人の声だけが、俺の世界にある。

……………いや、違う。

雷公がいる。

雷公が傍にいる。

さあ、雷公よ、俺に力を預けろ。

瞬間、体が熱くなる。

ふわりとした浮遊感。

世界から離れてしまったような感覚。

雷公の力を受け止めるって、こういう事なのか？

今までにない感覚だけど、確かになにかが流れ込んできているのがわかる。

これが雷公……。

その受け取った力を、再び雷公に集中させる。

「すごいよ……」

「素晴らしいです」

二人の声が聞こえたが、俺にはなんの事だかわからない。

ただ、雷公にだけ集中する。

感じる。

感じるぞ。

雷公に力が集まっている。

バチバチとした力が、雷公に集まっている。

「ファイ様、その力を空へ」

わかりました。

言われるがまま、俺はその力を全て空に向かって放つ。

バリバリッという音と閃光が体を震わせる。世界を震わせる。

閃光は空(くう)を裂き、雲を裂き、宙(そら)を裂いていく。

「これが雷公の力……」

「すごい。すごいよ、ファイ」

どうなったのか、俺にはよくわからない。

だけど、まだまだな気がする。

確かにすごかった。だけど、これは全開じゃない。もっともっと、まだ受け止め切れていない力がある。

「ファイ、本当にすごいよ。これなら、蟲(ベステート)と戦う時も余裕だよ」

キヨカは、ぴよんぴよんと跳ねて喜んでくれている。

「素晴らしい力です」

ミカツチさんも感動してくれているみたいだ。

確かに、これだけの力があれば充分だろう。実際、すごい威力だ。

だけど、やっぱり違う。

雷公の心がわかったからこそ、雷公の所有者だからこそわかる。

雷公はまだ出し切れずに、悔しい思いをしている。俺にはそれがよくわかる。

「雷公、もうちょっと待っていてくれ。絶対、お前の力を全て受け入れてみせるから」

そっと雷公に話し掛ける。

それに応えてくれたのか、パチッと小さな音が聞こえた。

「素晴らしい力でした」

「本当にすごかったよ」

道場に戻ってからも、それは続いていた。

ミカツチさんに認められるのは嬉しい。それは間違いない。だけど、届いていないものがわかっている。足りていない事がわかっている。だから、素直に喜ぶ事ができない。

「ファイったら……照れなくてもいいよ。もっと喜びなよ」

「あ、ああ……」

俺の引っかかりを感じたのか、ミカツチさんが言葉をくれる。

「ファイ様、今は全てを望む事は難しいでしょう。これから先は、蟲(ベステート)との戦いの中で学び、成長する事ではないでしょうか」

戦いの中で成長する。

それはわからなくはない。

「わたしに出来る事は限られております。わたしがして差し上げられる事は、道を示す事だけです。そのわずかな手助けをさせて頂いているだけです」

「そんな事はないです。俺は、ミカツチさんの教えがなければ、ここまで到達できなかったんです」

「光栄に存じます」

「俺はまだまだです。だから、まだミカツチさんの教えが必要なんです」

ここで終わってしまったら、俺は立ち止まってしまうかもしれない。

「いいえ、ファイ様にわたしの教えはもう必要ないでしょう」

「そんな事……」

「いいえ、もうわたしには、して差し上げられる事はなにも御座いません」

突然見放されてしまうなんて……。

「ミカツチさん、急にどうしたの？」

あまりの展開に、キヨカが動揺している。

「ファイ様の力は、既に雷公に認められております。でしたら、わたしにはもう……」

「じゃあ、私を強くして下さい。私を鍛えて下さい」

キヨカが身を乗り出す。

「まだ、ミカツチさんと一緒にいたいもん」

「シータ……」

その願いが叶わない事は、キヨカもわかっているはずだ。俺たちは、旅を続けなければならない。

別れてしまえば、二度と会う事はないだろう。

俺だって、ミカツチさんと別れるのはつらい。だけど、ずっとここにいるわけにはいかない。

「ファイ、わかってるよ。早く次の世界に行かないといけないんだよね。でも、私だって強くなりたいもん。ファイと一緒に、アーちゃんと一緒に戦えるようになりたいもん。それは本当だもん」

「シータ……」

ミカツチさんと一緒にいたいと思うのも本当だろうけど、その気持ちも本物だろう。

確かに、ミカツチさんのような人に、この先会えるなんて保証はない。剣術を習うなら今がチャンスだろう。

「わかった。シータが本気だってなら、俺からもお願いするよ。ミカツチさん、こいつを鍛えてやってくれませんか」

「……………ファイ様。シータ様」

俺たちは頭を下げて懇願する。

「……………承知致しました」

しばらく考えてから、ミカツチさんは頷いてくれた。

「よかったよお……」

キヨカは、今にも泣きそうだった。そんなに嬉しいのか。いや、俺だってもう少しこの時間を過ごせるのは嬉しいんだけど。

「そう致しましたら、明日よりシータ様の修練を、本格的に始めさせていただきます」

そういうわけで、キヨカの修行の日々がスタートした。俺は、自主練らしい。

「よう、ちょっと店に来てくれ」

キヨカが修練を始めてから一週間が過ぎた頃、ウォンカさんが道場にやってきた。

「ウォンカ殿、もしや完成したのですか？」

ミカツチさんが対応する。

「いや、もう少しってとこだな。でだ。お前たちのためだけの刀だからな、お前たちの癖を知っておきたくてな。それで、ちょっと店まで来てくれないか」

俺たちの癖？

「わかりました」

「うん、行くよ」

よくわからないけど、必要だっていうなら行くに決まってる。俺たちがお願いしてるんだから

。

「そうか。まあ、そんなに難しい事じゃないから、楽にしておいてくれ」

「わたしも同行致します」

「ああ、構わねえぞ」

「それでは」

とにかく、今日は修練は休みって事かな。たまには休息も必要だろう。

「そういや、雷公(らいこう)の調子はどうだ？」

列車に乗って、芸術家横町にあるウォンカさんの店に向かう途中、そんな事を訊かれる。造った本人とすれば、やっぱり気になるんだろう。

「はい。ミカツチさんのお蔭で、なんとか使えるようになりました。でも、全力はまだ……」

「ですが、ファイ様は完全に雷公を使いこなしておられます。わたしがお教えする事は、もう御座いませので」

「そうか……。まあ、ゼファーが言ってたが、そいつの力は国を滅ぼすかもしれないくらいだとき。もしそんな力を本当に出せるなら、人間にはどうしようもないだろうけどな」

それって、マジ？

多少は大袈裟に言ってるんだろうけど、伝説の四刀(しとう)なら、それ相応の力はあるだろう。以前の力は、まだまだ序の口だと思っていたが、それだけの力があるんだよな。

そんな力を手にしていると考えると怖くなってくる。俺の制御が上手くできなければ、国を滅ぼす力が暴走するって事だもんな。

「雷公ってすごいんだね……」

キヨカは心底感心している。

「この前のあれだけでもすごかったのに、まだまだなんだ……」

「向こうに着いたら、雷公の力を見せてもらえるか？」

「えっ？」

突然に申し出に驚く。

「やっぱり見ておきたいからな。どうだろう、ミカツチ」

俺にではなく、ミカツチさんに許可を求める。

「ファイ様さえ宜しければ。いかがでしょうか。最近の鍛錬の確認も兼ねて」

「そうですね。わかりました」

俺としては別にいいんだけどな。

「雷公の力を発揮するのは、街の中では無理ですので、荒野での披露になりますよ」

「.....そうか。そうだよな。ゼファーが来るかどうかが問題か」

どうやら、ミカツチさんの懸案事項もそこらしい。

「だが、雷公の力を見れるとなれば、いくらあいつでも来るだろう」

「そうなるよいいですね」

「面倒だ」

店に到着して、ウォンカさんの話を聞いたゼファーさんの第一声だ。

「お前な.....。雷公の力を確認したくないのか？」

「.....」

ウォンカさんに言われ、言葉を失う。

「しょうがない。確かに雷公の力なら、ここでは無理だろうな。行ってやる」

「最初からそうしておけ」

「五月蠅(うるさ)い」

なかなかいいコンビだな。

「そういえば、お前から預かった刀も、風を操れるんだったな。せっかくだから、それも見せてもらおうか」

タダでは行かないらしい。

「でも、折れちゃったのは大丈夫なのかな.....？」

確かにそうだ。

短刀にしても力は残ってるんだろうか。折れた時は、完全にその力を失っていた。

「その辺は、オレにはわからねえ。だが、こいつらからは、確かに強い力を感じるぞ」

そう言って、ゼファーさんは長刀と短刀をカウンターに置いた。

「これが、風伯(ふうはく).....」

「可愛くなっちゃったね.....」

俺たちは、短刀に姿を変えてしまった風伯に、言葉を失ってしまう。

「抜いてみてくれ」

ゼファーさんは、短刀となった風伯をキヨカに渡す。

「えっ？ 私？」

まさか自分にだとは思わなかったようだ。

「あんたはこっちだ」

俺には見た目には前と変わらない、長刀の方を渡してくる。

見た感じは変わっていない。

一見すると木刀にしか見えない鞘から抜くと、美しい刀身が現れる。

「.....これは」

その輝く刀身は、風伯と遜色(そんしょく)のないものだった。風伯が完全に復活したとしか思えない。

「どうだ？ 驚いたか」

満足そうにゼファーさんが笑う。

「はい、これって.....」

本当に風伯じゃないのか？ 繋ぎ合わせて元に戻したと言われても信じるだろう。

「そいつは、正真正銘新しい刀だ。少し、前の刀を使っちゃいるが、完全に新しいものだよ」

「本当に新しい刀なのですか。まさに、風伯そのものです」

ミカツチさんでもそう思うらしい。

「まあ、見た目は変わらないように感じて、違いはわかるだろ？」

まるで俺を試すような質問だ。

違い？

違いなんて、わかるわけない。それくらい、風伯とそっくりだ。

そりゃ、同じ鞘(さや)に収めないといけないわけだから、同じ形になるんだらうけど、そういう事だけじゃないんだ。感じる気迫が、風伯と同じなんだ。

「.....ん？」

なんだ？

見た感じはほとんど変わらない。だけど、妙な違和感がある。

「ん？ わからないか？」

「ちょっと待って下さい」

なんだろう？ 確かになにかが違うんだ。それがなんなのか、はっきりとわからない。

「まあ、微妙すぎるからな。わからなくてもしょうがない」

「.....重い」

何度か軽く振っていると、ほんのわずかだけど、いつもより腕の負担が大きい。

「ん？」

俺の言葉に、ゼファーさんが反応する。

「ほんの少しだけ、風伯よりも重いんだ」

重さにすれば、数グラムだろう。だけど、振っていると感じる。風伯を持っているよりも、わずかに重く感じる。

「.....ほう」

ゼファーさんが大きく頷(うなず)く。どうやら正解だったようだ。

「わかったか。ミカツチの教えのお蔭だな」

そう言って豪快に笑う。

褒められてるわけでもなさそうなのがな……。でも、なんとなくわかっただけで、こんなのは偶然だよな。じいさんの基礎やミカツチさんの教えがなかったら、わからなかったと言われてもしょうがない。実際そんな気がしてる。

「大きさは同じにしてあるんだが、どうしてもエピアの比重がな。負担になるほどじゃないだろ」

「はい」

雷公に比べれば断然軽いので、負担になるほどじゃない。

「じゃあ、そろそろ向かうか」

「ちっ、なんとか誤魔化せないかと思ったんだがな……」

「一緒に行かないと、完成させられないだろ」

「……わかってるさ」

ゼファーさんって、かなりの出不精だよな。その気持ちは、少しはわからなくもないけど、ここまでじゃないんだよな……。

俺たちは、短刀になった風伯(ふうはく)と新しい刀を持って、芸術家横町から少し離れた荒野にやってきた。

「ここなら、思う存分力を出せるだろ」

周囲には草木もなければ、建物もない。ひたすら大地が広がっているだけだ。ここなら、周囲を気にせずに、全力で振れるだろう。

「ファイ様、まずは雷公(らいこう)を」

「わかりました」

俺はみんなから少し離れた所に立つ。

「あの劔(つるぎ)の真の力、見せてもらおうか」

「ここまで来た価値はあるんだろうな」

そんな二人の声が聞こえて、少しだけ緊張してくる。しかし、自信はある。

「じゃあ、いきます」

雷公を抜いて構える。

雷公、その力を預けてくれ。

目を閉じて集中する。

体の中に、力が流れ込んでくるのがわかる。

それを、再び雷公に集中させる。

「すごいな……」

「ほう……」

帯電する雷公を見て、ウォンカさんとゼファーさんが声を上げる。

いける。十分に力は集まっている。

前を見据え、雷公の力を放つ。

バリバリッ！ と、大きな音を立て、雷公の衝撃波が空(くう)を斬る。

その衝撃に驚いたのか、ウォンカさんとゼファーさんが数歩下がる。

「想像以上だな……」

「威力が増しているな……」

そういや、ゼファーさんは前に見てるのか。蟲(ベステート)と戦ったのは、ゼファーさんが住んでいる所だったもんな。

あの時は、鷹(ファルーコ)の力を借りて、なんとか雷公の力を使えたただけだ。だけど、今は俺だけの力だ。だからこそ、確認してもらう意味がある。

「ミカツチの成果だな」

ゼファーさんはミカツチさんを賞賛する。……まあ、そうなるんだろうけど。

でも、遠回しに俺も認めてもらってると思いたい。

「雷公の力は、想像以上だったな……。まさかのものだよ」

と、ウォンカさんは素直に褒めてくれた。

「さて、本題に移ろうか。さっさと終わらせて、戻りたいんでな」

どこまで外がイヤなんだろう、この人は。

でも、本題ってのは……？

「そうだな。早く仕上げたいしな」

と、ウォンカさんが、俺とキヨカをじっと見る。

「えっと……なんだろう？」

「さあ？」

訊かれても、俺だってわからない。

「お前たちが持っている刀は、まだ未完成なんだ」

「「えっ？」」

俺たちは驚いて、それぞれ持っている刀を見る。

これが未完成？

充分完成品だと思ってた。

「でも、これが未完成って……」

「ミカツチならわかるだろ」

ゼファーさんはミカツチさんに訊く。

「はい。……しかし、風伯は所有者を特定せぬ刀です。その必要はないかと存じます」

「そうなのか？ だが、今の持ち主に合わせておくべきだろ？」

「今はそれでよいでしょうが、この先、所有者が変わった場合は、不都合が生じるのではないのでしょうか」

「つまり、ミカツチの意見としては、今のままでいいという事か？」

「はい」

「そうか……。どうするよ、ウォンカ」

「ミカツチがそう言うのなら、このままでいいんじゃないか？ こっちとしては、今に合わせてもいいと思うがな。ちなみに、ミカツチの言う先ってのは、どのくらいなんだ？ そんな頻繁に変わるのか？」

「それはわかりません。ですが、おそらく長い年月(としつき)でしょう」

「だったら、今でもよくないか？ 今を越えられないなら、先なんかないぞ。この先、あんなのと戦い続けるなら余計にだ」

「それはそうなのですが……」

「まあいい。お前ら、それぞれ刀を抜いて振ってみろ」

なんだか、完全に蚊帳の外の状態で話が進み、いきなり俺たちに振られてもな……。

「そうだな。ミカツチの意見を尊重はするが、今の持ち主次第だろ」

「それはそうなのですが、やはり……」

「ミカツチ、とにかく振らせてから考えればいい。ほら、振ってみろ」

「えっと……」

「ファイ、どうするの？」

どうすればいいのかわからずに、互いに視線を交わす。

「ファイ様、シータ様、それぞれの刀を振ってみてください」

ミカツチさんに言われ、俺たちは頷いて確認し、それぞれ刀を抜いた。

「あれ？ 私にも抜けたよ」

そういえば、風伯は持ち主を選ぶんだった。持ち主以外は、鞘から抜く事もできない刀だ。だけど、キヨカが抜いている。やっぱり、力が消えてしまったのか？

「シータ様、風伯を自らの一部であると想像してみてください」

「そういうイメージをして、風を感じてみる。でもって、風を集めるイメージだ」

本当に風伯の力がなくなったなら、それをしてもなにも起こらない。だけど、風伯がキヨカを持ち主と認めたなら、その力が顕れるはずだ。

「……うん、わかったよ」

キヨカは短刀となった風伯を正面に構えて、目を閉じてイメージをしている。

「私の一部。風をイメージ。風を集める。私の一部。風をイメージ。風を集める。私の一部……」

なにかの呪文のように、ぼそぼそと何度も繰り返し唱える。

俺たちは、そんなキヨカをじっと見ている。

「……風を集める。集める」

「うおっ」

カッと目を見開いた時、風伯の周囲に風が生まれていた。

「すごい……」

「短刀になっても、風伯の力はそのまmanaのか」

「すごい……。すごいよ、ファイ」

キヨカは、自分がしている事に驚きを隠せないようだ。

「風伯は、シータ様を主と認めたのですね」

まさか、キヨカが風伯の力を使えるなんて……。嬉しいんだけど、なんだか淋しい。

「ファイ、見て見て」

「ああ。すごいじゃないか」

淋しいけど、やっぱり嬉しい。キヨカが風伯の新しい相棒か。

「それが風の刀か。なるほどな……」

ゼファーさんが腕を組んで感心する。

「そんなすごいものを折ったのか、お前は」

ウォンカさんには肩を叩かれる。

……俺は、そんな風伯を折ってしまったんだよな。そりゃ、風伯も主を代えたいと思うよな。

「その力、雷公みたいにできるのか？」

「えっ？ えっと……」

そう言われたキヨカは短刀を振る。

「うわあっ」

振った本人が一番驚くような暴風が発生した。

周囲は土埃が舞い、視界が奪われる。仮面のお蔭で、舞っている割には目に入ってこないのだが、どうしても反射的に顔を覆ってしまう。

「すごいもんだな……」

「雷公に引けを取らない。この連中は面白い」

ウォンカさんとゼファーさんの、そんな声が聞こえるが、姿は見えない。

「これが風伯の力……」

と、ミカツチさんは、風伯の力に感動しているみたいだ。

だけど、確かにすごい。これって、俺が持っていた時よりもすごいんじゃないか？ 場所が場所だけに、そういう風に思えるのかもしれないけど、そういうのがなくてもキヨカの方がすごいような気がする。なんだか悔しいな。

「ファイ……なんだからすごいんだけど……」

キヨカは自分の力を実感していないのか？ いや、できないのか。あんなすごい力を、まさか自分が……って思っちゃうよな。それはわかる。俺だって、雷公の力を使ってるけど、実感できてるかどうかわからない。風伯の力を最初に使った時は、蜘蛛(アラネーオ)の力があってこそだから特になかな。

「ほれ、次はお前だ」

土埃がおさまった頃、ゼファーさんが俺に言う。

「えっ？ 俺もですか？」

雷公はさっき振ったから、この新しい刀の事だろう。でも、これは普通の刀じゃないのか？

「そうだ。いいから振ってみろ」

「……わかりました」

よくわからないけど、刀を振るだけなら問題ない。

「全力で、雷公の時と同じようにするんだぞ」

振ろうとした瞬間、そんな事を言われた。

雷公の時と同じように……？

よくわからないけど、とにかくそう言うならそうしてやるさ。

……しかし、雷公のような力は感じない。当たり前だ。これは雷公じゃない。そして、風伯でもない。

いったい、なにをさせたいんだ？

わからないまま、刀に力を込める。

やっぱりなにも感じない。

……そうだよな。普通の刀だ。感じなくて当然だ。

俺はそのまま、その刀を振る。

刀は空間を滑るように移動する。少し滑りすぎてないか？ 慣れないせいか、違和感があった

。

「……………」

ゼファーさんを見ると、じっとこっちを見ている……気がする。仮面越しなので視線はわかりづらいけど。

「風伯といったな。あの刀と同じようにして、もう一度振ってみろ」

今度は風伯？

「わかりました」

さっきからなんだろう？ でも、とにかく振ればいいんだろ。

新しい刀を構えて、自分と一体になっているのを感じる。この刀は、俺の一部だ。

そして、刀に風を集めるようなイメージ。

「……………っ！」

なんだ、これ。風を感じる。

風が刀に集まってくる。

でもこの刀は、風伯じゃないんだろ。

「雑念を捨てろ。余計な事は考えるな」

ゼファーさんの声が飛んでくる。

「ただ、刀がしたいようにさせてやればいいんだ」

刀がしたいように……。

じっと刀を見る。

お前は どうしたいんだ？

刀の声に耳を澄ませる。

刀が望む事。

それは、自分の力を最大限に引き出される事。

こいつの力は――

そうか！

ぐっと足元に力を入れて踏ん張る。力を抜けば弾かれる。

刀身に力が集まるのを感じる。

風だ。それも暴風だ。油断すれば、簡単に吹き飛ばされてしまう。

なんだ、これ。

「ファイ、なんだかすごいね」

「あれは……どういう事なのですか」

「ゼファーのヤツ、なにをしゃがったんだ」

困惑する三人の横で、ゼファーさんは腕を組んで、様子を見ている。

俺を包むように風が渦巻く。

そして――その風が一気にやむ。

今だ！

俺は刀を思い切り振る。

刀に吸い込まれるように消えていた風が、一気に放たれる。

「くっ……あっ」

自分でしたくせに、吹き飛ばされてしまう。それくらいすごい風だった。

制御しきれなかった風が、大地を這うように削っていく。

なんだ、これは……。

どうなってるんだ？ 風伯……なのか？

飛ばされながら、そんな事だけが頭をよぎっていた。

「ファイ、なんなの、あれ」

「ゼファー、なにをしたんだ」

俺と同じように、みんなも吹き飛ばされていた。その風がようやくおさまった頃、キヨカが駆け寄ってきた。

「……俺にだってわからねえよ」

ウォンカさんはゼファーさんに駆け寄る。

「予想以上だな」

ゼファーさんは満足そうだった。

いったい、なんだってんだ？

「お前、なにを企んでる？」

「別に、なにも企んじゃいねえさ。ただ、すごい刀だったんだろ、あれ。だったら、それを生かすのが、オレたちじゃねえのか？」

ゼファーさんとウォンカさんは、新しい刀を見る。

「だが、あれは……」

「あれは、元々秘められていたものだ。どういうわけか、制限されていたみたいでな。一度折れたお蔭で、それが解放されたってわけだ。まあ、あそこまでとは思わなかったけどな」

元々の力？

制限されていた？

……これが、風伯の力なのか？

「だが、やっぱ大きすぎるな。こりゃ、世界を壊しかねない」

ゼファーさんが抉れた大地を見る。

そこには、荒々しい傷があった。

「それに、操れてねえ。大きすぎる力は、自分を滅ぼすだけだ。……まあ、そこはミカツチになんとかしてもらおうか」

ミカツチさんは、尻餅をついたまま、茫然と俺たちを見ている。

「それはそれとして、その刀の振り具合はどうだった？」

「えっ？」

さっきの事が衝撃すぎて、意識が飛んでいた。

「刀の振り具合だよ。最初に一度、普通に振ったろ？ ん？ 一度じゃわからねえか？」

最初に振った時……。

「そうだ、違和感みたいなものがありました」

「違和感……。ほう、どんな？」

「はい。なんだか空気を滑るっていうか……。どう言えばいいんだろう……」

「いや、それでいい。……なるほど、滑るか。それは、上と下どっちにだ？」

「えっと……なんだか、上が滑る感じです」

「わかった。ちょっと調整してやるよ。さて、用件は終わった。とっとと戻ろうか」

そう言うなり、ゼファーさんは芸術家横町に向けて歩き出す。

えっ？ 終わり？

よくわからない俺たちは、しばらくその場に取り残される。

「どうした？ いつまでいるんだ？ 帰らないのか？」

その声に、俺たちはゆっくりと歩き始めた。状況がわからないまま。

店に戻ってくると、ゼファーさんは刀を奪うようにして、奥に入っていった。

「ゼファーのヤツ、とんでもないものを造ろうとしてやがるな」

「ねえ、ファイ。あれって風伯なの？」

キヨカは自分が持っている、短刀となった風伯と俺を見比べる。

「わからない。でも、あの力は風伯だと思う」

「そうだ。あの折れた刀は、二振りの刀になったんだ」

ウォンカさんが教えてくれる。

「そっちはもちろん、あの刀にも、折れた刀身を打ち込んでいる。だから、元の刀の力を宿していても不思議じゃない。だが、ゼファーは、その先をやっているみたいだな」

「その先？」

「元の刀以上のものを打とうとしている」

「……………風伯を超える風伯？」

「そうだな」

それが、制限されていた力の解放？ あれが、風伯の本当の力？

……すごいなんてもんじゃない。あんな力、制御できるのか？ 人間ができる限界を超えてるんじゃないのか？

「もしかして、私の風伯も……？」

キヨカの手が震えている。

そうだよな。それこそ、本当の風伯だ。だとすれば、この短刀だって、あんな力を……。

「いや、そっちは封印したままだ。もちろん、解放する事も可能だがな」

「ううん、このままでいい」

キヨカは全力で首を振った。

そりゃ、あれだけの力は怖いよな。

「これが……伝説の四刀の力。もしかして、雷公も力が封印されているのですか？」

ミカツチさんが質問する。

「それはないな。あれは、既に解放されている。持ち主次第で、どこまでも強くなる」

持ち主次第……。つまり、俺が雷公の力を受け止められれば、それだけ強くなるってのか。恐ろしくなってくる。

ただ、普通の場合じゃ、その力を出せないだろうな。

今でもあれだけだ。あり得ない力が秘められてるんだろう。

しばらく待っていると、奥からゼファーさんが出てきた。

「これでどうだ？ もう一度振ってみろ。……もちろん、力は出すなよ」

そう言いながら刀を渡される。さすがに、店内で力を出すわけにはいかないだろ。

「わかりました」

キヨカたちが離れたのを確認して刀を振る。

ブンと気持ちいい風切り音。

「何度か試してみろ」

「はい」

俺は言われるまま、色々な方向で試す。

どの方向も気持ちいい。全くブレない。

「すごいです。こんなにブレないなんて……。まさに俺のための刀って感じですよ」

「そうか。調整はそんなもんで大丈夫そうだな。他になにか気になることはないか？ ちょっとした事でもいいぞ」

「そうですね……」

ほぼ理想的な刀だ。風伯よりは重いが、雷公を使っている今は、そんな苦になる事はない。

「調整するなら今だぞ」

そう言われると、なんだか焦ってくる。

「えっと……」

「今ないって事は、満足してるみたいだな。無理に変えなくてもいい」

「……はい」

「お前は、ちゃんと刀をわかっている。それでいい」

褒められたのかなんなのか、なんとも微妙な気分だ。

「これで満足しています」

そう言うと、ゼファーさんは、そっか……と大きく頷いた。

「これで、オレの仕事は終わったな」

達成感というよりは、厄介事を終えたって雰囲気だな……。

「もう戻る気か？」

「当然だろ。オレの仕事は終わった。これ以上、ここにいる理由はねえ」

ウォンカさんの問いに、間髪入れずに言い切る。

「……まあ、お前を引き留める理由は、もうないか……」

ウォンカさんは残念そうだが、ゼファーさんは全く気にしていないらしい。

「そうだ。フェイズに頼まれていたナイフも完成している。お前たちが渡してくれるんだったな」

そういえば、そういう事を言ったんだった。

「はい。私たちが、責任を持って預かります。そして、絶対に渡します」

「おい、大丈夫なのか？」

胸を張って言い切って大丈夫なんだろうな。

「こっちとしちゃ、渡せる機会が多い方がいいからな。お前たちなら大丈夫なんだろう？」

「はい」

またしても力強く言い切るキヨカ。本当に大丈夫なんだろうな。

「じゃあ、渡そう」

ウォンカさんは、丁寧に梱包されたナイフをキヨカに渡す。

「こりゃ大変だね。重要任務だよ」

本当にわかってるのか？

まあ、キヨカならなんとかするだろ。もっとも、それは俺も同じか。

「確かに預かりました。俺たちが、フェイスさんに渡します」

「おっ、ファイも言うじゃない」

五月蠅い。

「という事は、これで全て終わったのかな」

風伯も打ち直してもらったし、フェイスさんのナイフも預かった。確かに、これでもう頼んでいた事はない。

「そうだ。これ」

キヨカは荷物の中から、俺が作ったマスコットを出して、ウォンカさんとゼファーさんに、それぞれ渡す。

「なんだ、こりゃ」

「ファイが作ったマスコットだよ」

「ほう……。あんたが作ったのか」

ぐいっとゼファーさんが顔を近づけてくる。

「は、はい……」

なんだ、この威圧感は。

「こんな、ちまちましたもんを作るとはな……」

ゼファーさんの方が、仕事が細かいと思うんだけどな……。わずかな刀身の流れを、すぐに変えられるんだから。

「まあ、遠慮なくもらっといてやる」

なんだか嬉しそうな声でよかった。

「ところで、ミカツチの修行はもういいのか？」

そういえば、キヨカの修練はまだ途中だったな。

「ファイ様は、もうお教えする事は御座いません。今は、シータ様の修練を指導させて頂いております」

「そっか。そっちの嬢ちゃんか。風伯を使いこなせるようになら……。どうだ、新しい刀も使ってみたら」

新しい刀って、これだよな。

制御されていた力を全て解放した刀。

「でも、私は……」

「やってみる価値はあるんじゃないか？ どうだ、ミカツチ」

「……確かに、シータ様も使用する事が可能でしょう。ですが、今のシータ様では、あの力を制御出来ません」

キヨカがというよりも、俺もできてないからな。

「ですが、短刀だけでなく、長刀も使用出来る方が、この先有益と考えます」

確かに使えたら、戦いを有利に運べるかもしれない。だが、それはキヨカが前線に立つって事だ。そんな危険な状況にさせるわけにはいかない。

「嬢ちゃんはどうだ？」

「私？ 私は……」

キヨカは俺を見る。だが、俺はなにも言う事ができない。

「やってみる。できなくてもいいから、やってみる」

……ったく、キヨカらしいな。

「わかりました。シータ様がそれを望まれるのでしたら、それを叶えるのが私の使命です」

ミカツチさんもやる気になる。

こりゃ、ますます鍛えないと、キヨカに追い抜かれてしまうな。

「ミカツチなら、最強の剣士に仕上げるだろうな」

「全力を尽くします」

「ねえ、ファイの新しい刀の名前ってどうする？ もうあるのかな？」

その日の夜、食事中にキヨカがそんな事を言い出した。

「刀の名前……？ そういや、ウォンカさんとゼファーさんは、なにも言ってなかったな」

雷公はあの二人から聞いた名だ。だけど、この刀を渡された時は、それらしい名前を聞いていない。

「きっと、ないんじゃないか？」

「だったら、私たちが決めようよ。名無しは可哀想だよ」

「可哀想って……」

「それに、名前がある方が大切にするでしょ」

「別に、名前がなくてもそうするっての」

確かに、愛着はわくだろうけど、だからって、それだけで変わるものか？

「それでも、やっぱり名前は大切だよ」

「そうか……？」

でも、確かに名前はあった方がいい気はする。

だけど、どんな名前がいいんだろうな……。

「やっぱり、風伯の力があるから、風に関係する名前がいいよね」

「そうだな」

「風伯よりすごい風だったから、風っていうよりも嵐って感じだよ」

「そうだな」

「じゃあ、嵐なんとかってのがいいかな……」

「そうだな」

「って、ファイはちゃんと考えてる？」

「そうだな」

「こらっ」

ぺしっと頭を叩かれる。

「痛っ。なにすんだよ」

「ちゃんと人の話を聞かないとダメなんだよ」

「考えてただけだろ」

「ったく……これだから、男ってダメなんだよね。話を聞いてないんだから」

「そう言われてもな……」

考えごとをしながら、誰かと話せるかっての。

「じゃあね、私が決めてあげるよ。嵐帥(らんすい)ってどうかな」

「らんすい……？」

不思議な響きだな。

「らんすい、のらん、は、十中八九嵐、だよな。」

「えっとね、こういう字だよ」

と、キヨカは空中に書いて教えてくれる。

「……すまん、よくわからん」

嵐ってのはわかったが、後半がわからない。

「すい、ってどんな字だ？ 想像もできないんだが……。」

「しょうがないな……ちょっと待ってて」

食事中なのだが、キヨカは席を立って、なにかを取りに行った。

すぐにノートとシャープペンシルを持って戻ってきた。

「こういう字だよ」

と、ノートに書いてくれる。

「嵐帥……」

こういう字だったのか。

普段使わないから、空中に書かれてもわからないっての。それに、そもそも思い浮かびもしなかったね。

「だけど、よくこんな字を書けたな……。難しいってわけじゃないかもだけど、使わないから出てこないだろ。」

「どう？ いい名前でしょ？」

「よい名ですね」

「でしょ、でしょ」

俺より先に、ミカツチさんが賛同する。

まあ、悪くはないな。

「じゃあ、今からこの刀は、嵐帥に決定ね」

もう俺の意見はどうでもいいらしい。

「わかったよ。俺もそれでいい」

「なんだよ、その投げ遣りな感じ。それゝで、いい？ それゝが、いいじゃないのは、刀に失礼だよ」

「言葉の綾(あや)じゃねえか。イヤだったら、使わないっての」

「素直じゃないな……。ファイは、他に付けたい名前ってあったの？」

「……いや、なかった」

「なにも思い浮かばなかった。だからってわけじゃないけど、キヨカが決めたその名前でいいと思う。いや、その名前がいい。」

「俺も気に入ってるよ、ちゃんと」

「うっわあ、適当だな……」

「さっきから、揚げ足ばっかだな」

「ファイが素直じゃないんでしょ。本当はなにかあったんじゃないの？」

「だからないって言ってるだろ」

「はい、お二人とも落ち着いて下さい。食事中ですよ」

ヒートアップしそうになっていた俺たちを、ミカツチさんは冷静に止める。

「すみません」

「ごめんなさい」

俺とキヨカは、しゅんと肩を落とす。母親に叱られた子どもみたいだな。

「まずは食事です。シータ様もよいではないですか。ファイ様は照れておられるだけですよ、きつと」

「……はい」

それから、なんとなく喋りづらくなり、俺たちは黙々とご飯を食べた。

「シータ、本当に気に入ってるんだ。嵐帥、大切にするよ。なんたって、俺の相棒だからな」
寝る前に、それだけを告げた。

「おっはよ、ファイ」

翌朝、キヨカはいつも通りに元気だった。むしろ元気すぎる。

「嵐帥と雷公もおはよう。風伯もおはようって言ってるよ」

ご機嫌すぎる。気持ち悪い。

「今日はテンションが高いな」

「だって、すごい刀が勢揃いなんだよ。これで、ヒナゲシさんの炎帝(えんてい)があれば、もっとすごいけどね」

確かにそうだな。

伝説の四刀プラスワンか。四刀が揃ってないのがアレだけど。

「というわけで、今日も頑張るよお～」

なにが、というわけなのかわからないけど、キヨカがそれでいいならそれでいいよな。

「俺も頑張りますか」

「もっと気合い入れなよ。嵐帥が泣くよ」

「わかったよ」

妙にやる気なのはいいんだけど、空回りするなよ……なんて、俺が心配する事でもないか。

「じゃあ、朝ご飯だね」

とてとてと走っていくキヨカ。ホントに元気だな。

やれやれ……。俺もご飯を食べて、ひたすら振るか。

まずは雷公だよな。やっぱ、これを使えないとな……。これが、俺の本命なんだよな。

「頑張るからな、雷公」

そんなわけで、今日も特訓だ。

キヨカは、ミカツチさんに短刀での戦い方を学んでいる。剣道経験があったとしても、これはまた別物だ。キヨカは悪戦苦闘している。

っていうか、俺だって短刀で戦えるかどうか……。

それにしても、やっぱりキヨカは器用だよな。最初こそ手探りだったけど、徐々に様になってきている。

でも、それよりもミカツチさんがすごいよな。この人って、本当に何者なんだろう？ 普通の刀はもちろん、雷公と同等の大きな刀でも、短刀でも難なく使えている。もしかして、歴史上の剣豪……って、そんな事ないか。俺が知っている限り、女性の剣豪は知らない。実は男として伝わってるだけ……って事もないだろうな。

「どうしたの、ファイ」

「いや、なんでもない。お前ってすごいなって」

「なんだよ、もう。照れるな……」

本気で照れてやがる。

「シータ様は、本当に素晴らしいです。あつという間に、自分のものにされています」

「ミカツチさんまで……。そんなに褒めると、天狗になっちゃうよお」

胸を張って、斜め上を見るキヨカ。もう、天狗になってるし。別にいいけどな。

「それじゃ、俺も負けてられないな」

「そうだよ、ファイ。こんな機会ないんだから、とことんまで強くなろう。でも……」

キヨカは言葉を切る。どうしたんだ？

「でも、時間はあまりないよね。まだ、封印できてない蟲(ベステート)はいっぱいだもん。そのせいで、色んな世界が大変な事になってるんだよね」

「……そうだな」

そうだ。俺たちは、ゆっくりしてられない。この世界にいる時間が長すぎてるんだ。

その間にも、蟲(ベステート)の影響で壊れていく世界があるはずだ。

「ファイ様、シータ様。お急ぎなのは、承知しております。しかし、ここでの時間、無駄にさせるつもりは御座いません」

ミカツチさんが強く言う。

「私だって、そのつもりだよ」

「まあな。ミカツチさんに鍛えてもらえれば、この先どんな状況でも、なんとかできそうな気がしてくるよ」

「ファイは油断しちゃダメなんだからね」

「わかってるよ」

俺たちは拳を合わせる。

「その信頼に応えるべく、全てをお伝え致します」

「「よろしくお願いします」」

「風伯、力を貸して」

荒野に立ったキヨカは、手にした風伯に語り掛ける。

それに応えるように、風伯の刀身が風を帯びる。

その風は砂を巻き上げ、キヨカの姿を隠していく。

「刃となれ！」

キヨカの声で、砂が吹き飛んでいく。そして、キヨカの姿が現れる。

キヨカの周囲にあった風は、全て風伯の刀身に集中している。

その形は、まさに刀そのものだ。

元の刀身を延長させるかのように、風の刃がそこにある。

「すげえ……」

何度か練習して、ようやく完成させたキヨカの風伯の到達点。

短刀としての風伯。そして、長刀としての風伯。状況に応じての使い分け。

もちろん、それだけじゃない。

風伯の威力は、段違いになっている。

「シータ様の力は、相当なものとなっております。風伯との相性も宜しい様ですし、新しい風伯の力を引き出してみませんか」

一〇日前、ミカツチさんがそんな提案をしてきた。

「新しい力？なんですか、それ」

キヨカは首を傾げる。俺も同じだ。

「風伯の力って、どういう事ですか？」

「シータ様の風伯は、本来の長刀から姿を変え、短刀となってしまわれております。ですが、それでは恐らくですが、風伯の力を生かしきれない可能性が御座います」

「生かしきれない.....」

キヨカが呟く。それは、本人もわかっているんだろう。

「そこで、ひとつ提案が御座います。これは、想像の域なのですが――」

そう前置きして、ミカツチさんは、今回の事を提案してきた。

風伯の風を利用して、刃を生み出してみてもどうか、と。その風の刃で、風伯本来の姿を取り戻し、風伯の力を引き出してみる。

キヨカはそれに賛成し、それ以降は、風伯の風を自在に操る特訓を続けていた。剣術は、既に充分な腕になっていた。なのでそっちは問題ない。あとは、この特殊な刀をどう使いこなすかだ。

同時に、俺の雷公に関しても、その力を引き出す特訓を開始する。

その為、俺たちは道場ではなく、外で修練をする事になった。

そんな日々を過ごし、その力を試す時がやってきた。

「すごいな……」

キヨカが生み出した風伯の刃は、まさに以前の姿を取り戻している。ただ、通常の刃ではないので、その切れ味は、キヨカ次第となる。その辺は、どうやら相性がよかったのか、キヨカの才能なのか、まさに鎌鼬といったところか。触れるだけで切断する程だ。

その刃を生み出すのは、比較的早くからできていたが、その維持に時間を費やした。やっぱり、同じ状態を維持させるのは難しいみたいだ。

その結果が今だ。

「素晴らしいです」

ミカツチさんがキヨカを褒める。

「シータ様、その状態をしばらく維持して下さい。その状態をしばらく維持した後、素振りをしてみて下さい」

遠くからキヨカに声を掛ける。

「はい、わかりました」

遠くから声が返ってくる。

あれを維持して、そこからそのまま振るってのは、俺にはできそうにない。かなり難しいはずだ。

~~~~♪

風に乗って音楽が聞こえてくる。

「あいつ……」

どうやら、キヨカは鼻歌を唄っているようだ。

「ったく……」

あいつらしいな、こりゃ。

音楽と組み合わせるのは正解かもしれない。音に馴染みのあるキヨカだ、音程と風の維持が似ているのかもしれない。事実、風伯の風は全くブレない。むしろ、勢いを増しているかのようだ。

「シータ様は、どうやら自らの得手を生かされている様ですね」

ミカツチさんもそれを感じたみたいだ。

キヨカの得意分野と合わせれば、難しい事でもなんとかなる。

俺もなんとかしらないとな。

キヨカが成功したので、緊張してくる。

俺の方は、キヨカに比べれば単純なものの、それでも容易じゃない。もっとも、それは俺の力量の問題なんだろうけど。

「シータ様は、本当に才がおありですね。ファイ様も素晴らしいですが、シータ様は……失礼致しました」

ミカツチさんは口を押さえる。

「いえ、本当の事です。あいつの器用さは、俺には真似できません。羨ましいです」

「ファイ様も、相当の腕をお持ちですよ。わたしが知る限りでは、他に数人とおりません」

「ありがとうございます」

フォローなんだろうけど、それでも嬉しい。その期待には応えないとな。

「シータ様、そろそろ振ってみてください」

「はい」

ミカツチさんの合図で、今まで維持していた風の刃を振る

ぼわっと土埃が舞う。瞬間、風の刃が消える。

「あっ……」

キヨカは、消えてしまった刃を見る。

やっぱり、キヨカでも難しかったみたいだ。

「残念」

ぼそりと呟くが、表情は残念そうじゃない。むしろ、やる気になっている。むしろ楽しそうだ

。

「ミカツチさん、もう一度してもいいですか？」

「いえ、しばらく休んで下さい。ご自分で思われているよりも、体力を消耗されているはずで

」

「でも、コツが……」

「休む事も重要ですよ」

まだまだ物足りなさそうだが、ミカツチさんに言われ、キヨカは渋々こっちに歩いてきた。

「次はファイ様、雷公の力を試してみてください」

「はい」

いよいよ俺の番だ。

俺はキヨカと交代するように歩いていく。

「頑張ってね」

すれ違いざま、キヨカが声を掛けてくれる。

「おう」

拳を合わせて応える。

こりゃ、ますます頑張らないとな。ちょっとやそっとじゃ満足できそうにない。

キヨカがさっきまで立っていた場所か……。こんな景色なのか。遠くまでよく見える。ここから、俺たちがさっきまでいた場所は、向こうで見ていた時よりも遠くに感じる。

雷公を抜いて構える。

「ファイ様」

ミカツチさんの声は、はっきりと届く。

「はい」

いよいよだ。

俺の場合は、キヨカほど器用な事をするわけじゃない。

雷公、俺に全てを委ねてくれ。

俺の場合は、雷公の力を受け入れる特訓だ。

雷公の力が流れ込んでくるのがわかる。

体に電気が走る。雷公の力を全身に感じて、俺自身が電気を帯びる。そうすれば、攻防一体となる。それが、俺が導き出した到達点だ。

雷公にその力を集中させる。これは、基本的な事だ。

今度は、その力を俺の体に集中させる。

「くっ……」

これがきついんだよな。

電気が体中を走るんだ。この状態を保つ。

俺の周囲の電気が、地面の中の反応する物質を引きつけている。それが、空中で静止する。

「ファイ様、その力を上げて下さい」

もっとか……。

さらに集中させる。

雷公から力が流れ込んでくる。

「うっ……」

その勢いに、膝が崩れそうになる。

最初に比べれば受け止める事ができるようになったけど、やっぱりまだまだきつい。

まだだ。

もっとだ。

もっとももっともっと。

自分から全てを出し切るイメージ。

イメージはできても、それを実践するのは簡単じゃない。

ひたすら耐えるだけなんだが、それが厳しいんだよな。

「くっ……」

まだ、俺には無理なのか？ そもそも、俺にできるんだろうか。

「ダメだダメだ」

ぶんぶんと首を振る。

俺がそんな事を考えちゃダメだ。

俺はできる。

俺ならできる。

そう考えてないと、雷公はその力を預けてくれるはずがない。

「雷公……もっと、もっとだ」

雷公に語り掛ける。

「うっ……」

俺の言葉に答えて、雷公から流れてくる力が強くなる。

流れ込んでくる力を受け止めきれない。

俺の体が破裂しそうな感じだ。

「……………」

中から色んなものが逆流してくるみたいだ。

それらを全部飲み込む。

ここで負けるわけにはいかないんだよ。

キヨカは、あんなすげえ事をしたんだ。俺がここでへばってるわけにはいかないんだ。悔しいって言うよりも恥ずかしいだろ。

そう、男としてな！

「うおおおおりやあああっ！」

自分に気合いを入れる。

バチバチッと弾ける音がする。どうやら、足下の石が弾けているみたいだ。

もっと……もっとだ。

全て受け止めてやる。俺のキャパいっぱい、受け止めるんだ。

体内で電気が弾け、視界に火花が散る。

頭の中もぼんやりとしてくる。

「いけない！ やめて下さい！」

「ファイ、やめてって。ねえ、聞こえてないの？」

なんだか声みたいなのが聞こえてくる。

「くっ！」

ダメだ、もう無理だ。

「ファイ、やめてって言ってるでしょ！」

雷公を真上に向け、全ての力を空に向けて放つ。

バリバリッ……と、空気が割れるような音がする。その音に、耳が遠くなる。

「うわっ」

と思ったら、いきなり突風が吹いて、吹き飛ばされた。もちろん、雷公の力は拡散してしまう

。

せっかく溜めたのにな……。

残念に思うけど、どうせ空に放つだけだったし、いいとしておこう。

「いてて……」

思い切り吹き飛ばされて、仰向けになっている。ああ、空が綺麗だな。最後に放った雷撃がパチッと弾けて消える。

それにしても、すげえ風だったな。まるで、風伯の風みたいだ。

「ファイ、大丈夫？」

「大丈夫ですか、ファイ様」

キヨカとミカヅチさんが駆け寄ってくる。

起き上がろうとしたけど起き上がれないので、そのまま寝ている事にした。

「よう、シータ」

キヨカが顔を覗き込んできたので挨拶する。

「なにが、よう、だよ。ミカツチさんがやめろって言ったのに、なに続けてんの。ファイになにかあったらどうするんだよ」

えっ？ ミカツチさんが？ なんの事かわからない。俺を止めようとした？

「シータ、ミカツチさんが……？」

「そうだよ。ミカツチさんが、ファイが力を集めすぎだって、それで止めようとしたんだよ」

そうだったんだ。俺が無茶をしたからか……。

「ファイ様、大丈夫でしたか？」

ミカツチさんが心配そうにこっちを見ている。

「すみません。全然聞こえてませんでした」

一瞬、声のようなものが聞こえた気はしたんだけど、それが本当に声なのかわからなかった。

「お体に異常はありませんか？」

「頭がダメなんだよ、きっと」

おい、キヨカ。

「……いえ、大丈夫そうです。ちょっと、立てないみたいですけど」

立てないっていうか、体に力が入らない。感覚もよくわからない。

「それって、大丈夫って言わないよ。なに暢気にしてるのさ」

キヨカが怒っている。

「悪い。でも、それ以外は大丈夫だから」

「だから、それが大丈夫じゃないんだって。ホントにファイってば……。ミカツチさん、こいつここに放置しておきましょう。そうでもしないと、反省しないですよ」

おいおい、それは勘弁してくれよ。

「しかし、それではファイ様が……」

「いいんですって。これくらいで死にやしませんよ」

いや、それは保証できないだろ。

「ですが……」

「いいんですって。師匠の言葉を見無視するのが悪いんです。これも修行のうちですよ」

さあ行きましょう、とキヨカはミカツチさんの腕を引いていく。ミカツチさんは、最後までこっちを見ていたが、キヨカに引っ張られるまま帰ってしまう。

あれ……？ 本当に放置ですか。

まだ暗くないからいいものの、しばらくしたら暗くなるだろ。本気で、ここで一晚過ごさせて事なのか？

「おい、シータ。すまん、俺も連れてってくれよ……」

しかし、その願いは風の中に消えていった。

あいつ……ホントに放置していきやがった。

日が暮れてくる。

そろそろ戻ってくるかな……と思ったが、本当に戻ってこない。

「まあ、本気なんだよな」

キヨカの場合、本気に決まってるよな。ちょっとだけ、戻ってくるかもって期待したけど、呆気なく裏切られた。いや、ある意味じゃ期待通りか。ミカツチさんがいれば違うかとも思ったんだけどな……。

暗くなっていく空を見ていると、

「あ、一番星」

まだ明るいながらも、それが確認できた。

「痺れてる感じだな……」

ようやく感覚が戻ってきた。が、そのお蔭で痺れていたんだとわかり、感覚がなくてもよかったかと思える。

体の中がピリピリしている。静電気が、体中を走っている感じだ。

今日はこのまま放置かな……。

空はだんだん暗くなり、星が瞬いている。

風も冷たくなってきた。まあ、凍える程じゃないけど。かといって、このまま放置されると、低体温症とかにならないか？ そうならないように、なんとしても動かないと。

「んっ」

腕を持ち上げようとするが、痺れて力が入らない。それでも、少しだけ持ち上がった。

この調子だと、今晚はなんとか生き延びないと、だな。

朝日が眩しいぜ。

結局、あのまま放置されていた。

なんとか生き延びたぜ。

ちょっと寒いけど、風邪をひく事もなかった。

そして、体も動くようになっていた。さすがに一晩寝たからな。

よいしょっと体を起こす。

動けるようになったが、体が痛い。そりゃそうだ。こんな地面に寝てたんだからな。

軽く体操をして体を動かす。

雷公と嵐帥を持って、ミカツチさんの道場に向かう。



「あ、生きてたね」

道場の外では、キヨカが風伯で素振りをしていた。

「お前、本気で放置って、なに考えてんだよ」

「ファイなら、私が本気だってわかってたでしょ」

「……………」

わかってたさ。だけど、ここで肯定するのはどうなんだろうな。かといって、否定しても嘘だと言われるだけだ。

「無事に生きてたんだし、よかったじゃない」

それだけ言って、素振りを続ける。

「ファイ様、ご無事でしたか」

俺たちの声を聞きつけて、中からミカツチさんが出てきた。

「心配致しました。お体は異常ありませんか？」

「ありがとうございます。なんとか無事です」

俺の顔を見て、心底安心してくれる。当たり前なんだろうけど、キヨカの対応に慣れてると新鮮を感じる。俺って、なんだかんだで毒されてるよな。

「ファイも素振りしなよ」

「そうだな」

ミカツチさんは、体調を心配してくれているが、素振りをするくらいでちょうどいいと思う。だけど、雷公だと負担が大きそうなので、嵐帥で素振りをする事にした。

「無理だけはなさないで下さい」

ミカツチさんは、常に心配してくれていた。

素振りを終えて朝食だ。昨日からなんにも口にしていなかったのを、今になって思い出した。

空腹よりも疲労の方が強烈だったもんな。疲れすぎて、食欲もなかった。

それがどうだ、こうして美味しそうな朝食を前にすると、現金なもので空腹感がなくなってしまう。

「腹減った……」

「ファイ、がっつきすぎだよ」

「そう言ってもな、昨日からなんにも食べてないんだって」

「そういえばそうだね。……でも、今食べれるんだから、いいよね」

よくねえだろ、と思ったが、キヨカと言ひ合うよりも、食べたい欲求が勝った。

「ファイ様、急がれますと体に良くありませんので、ゆっくり召し上がって下さいね」

ミカツチさんが、にこやかに笑っている。

その笑顔を見ていると、昨日、放置された事なんかどうでもよくなった。

「いただきます」

手を合わせて、白ご飯をかき込む。

「旨い……」

こんな美味しいご飯、食べた事がないってくらい旨い。

玉子焼きと一緒に食べると、心まで満たされる。

「ファイってば……もうちょっとゆっくり食べなよ」

「んまい(うまい)。ほれもふあいほう(これも最高)」

キヨカという言葉なんか耳に入ってこない。

ひたすら空腹を満たす。

ミカツチさんが漬けた漬け物も旨い。

「んぐっ」

勢いよくかき込んでいると、ご飯が喉に詰まった。

「ん、んん」

お茶を求めて手を伸ばす。

「ほら、ゆっくり食べないからだよ」

そう言って、キヨカはお茶を遠ざける。

なっ……。なにしやがるんだ。

「ん、んがっ」

やばい。このままだと……。

「ちゃんと反省するんだよ」

コクコクと頷く。

「本当に反省してる？」

コクコクと頷く。むしろ、ブンブンというくらいだ。

「本当？」

ブンブン。

「本当に本当？」

「……………んっ。んんっ」

本当に呼吸が……。

「ファイ様」

ミカツチさんが慌てて、お茶を渡してくれる。

それを受け取り、一気に流し込んで……、

「げは、げはっ」

噎せた。

「っはあ〜」

噎せはしたものの、ようやく落ち着いた。

「ファイ様、ゆっくりと召し上がって頂きませんと」

「すみません」

素直に謝る。

「本当にありがとうございました」

冗談でも大袈裟でもなく、ミカツチさんは命の恩人だ。

「シータ、お前な……」

「ごめん、ごめん。思ったより危なかったんだね」

「冗談ですむか。本気で死ぬかと思ったんだぞ」

「でも、自業自得だよ」

「うっ……」

それを言われると弱い。

本当に自業自得だもんな。キヨカもミカツチさんも、注意してくれてたのに、俺がゆっくり食べなかったのが悪いんだ。

「それはそうだけど、あの状況であれはないだろ」

お茶を遠ざけるのは、命に関わるだろ。

「ちょっとだけ反省してるよ」

ちょっとだけかよ……とは言いにくい。俺こそ反省しないといけないんだよな。

「じゃあ、続きだよ続き」

「そうだな」

と、今度は落ち着いてゆっくりと食べる。

ああ、本当に旨い。

ご飯を食べれば修行だ。

なにせ、まだまだだったからな。

雷公の力を受けきれずに、結局暴走させてしまった。俺のキャパじゃ、受けきれないってわけだ。もっとも、修行してどうにかなるかわからない。それでも、もっと強くなりたい。キヨカを護れるように。

「ファイ、頑張っって強くなるんだよ。私みたいにね」

えっへんと胸を張るキヨカ。まあ、こいつはちゃんと風伯を制御できたもんな。風の刃を操れた。自分と比べると、器用だと思う。

「シータみたいになれるよう、頑張ります」

そう答えると、よろしい、と満足げだ。

「ファイ様は、無茶をされなければ、充分過ぎる力を有されております。自らの限界を無理せず、徐々に伸ばしていかなければなりません」

頑張ろうとしたところへ、ミカツチさんの言葉が。

「だってさ、ファイ」

ミカツチさんの言葉を、さも自分のもののようにするのはどうなんだ。

「そういう事ですので、ファイ様は体への付加を考慮して、修練を行って下さい。シータ様も、無理をなさらず、現在の力を保つ様にして下さい」

「「はい。わかりました」」

なんともやる気を殺がれた感はあるけど、師匠の言う事には従わないとな。

キヨカと俺は、とにかく風伯と雷公に慣れるために、素振りをする事になった。

それぞれの力は使わず、刀身を自分のものとするためだ。

「それぞれの力も重要ですが、通常の戦闘では、風伯と雷公そのものを使えなければいけません」

確かにそうなんだよな。

風伯の風の刀身はともかく、雷公の力は大きすぎて使えないシーンも多い。やっぱり、この風伯を普通の劔として使えないと意味がない。

「ですので、力に頼らない戦い方にも慣れて頂く必要がございます」

そうだよな。

たとえば街中だったら、雷公の力を出し切るのは不可能だ。そんな事したら、周りも滅茶苦茶にしてしまう。風伯なら、なんとか被害を少なくできそうな気はする。ただ、嵐帥だと難しいかも。俺の制御が甘いからな……。

「助けて 蟲(ベステート)に食べられる、

突然、そんな声が聞こえた。中性的な響きだ。

いや、耳にというよりも、頭の中に直接響いた感じだ。

「ファイ、今のって」

「シータ、お前も聞こえたのか」

「ファイ様、シータ様、先程の声は……」

「ミカツチさんも聞こえたんだ。でも、ここって、私たちしかいないよね」

そうだ。そのはずだ。

この道場には、俺たち三人しかいない。

外から聞こえてきたのかと思い、俺たちは道場を飛び出すが、そこには誰もいない。

「シータ、蜘蛛(アラネーオ)に訊いてみてくれ」

「あ、そうだね。アーちゃん、蟲(ベステート)って近くにいるの？」

この世界の蟲(ベステート)は、俺たちが封印したはずだ。だから、いるはずがない。

「反応皆無、

「だよな……」

やっぱりそうだ。

だったら、さっきの声は……。

「私だけじゃなくて、ファイもミカツチさんも聞こえたんだよね。だったら、空耳じゃないよね」

そうなんだ。俺だけだったら空耳かと思うんだが、三人とも聞いている。聞き間違いのはずがない。

「ですが、蟲(ベステート)は……」

ミカツチさんも戸惑っている。

「彼(か)の声は、異なる世界からのものだ、

俺たちの疑問を解決してくれたのは鷹(ファルーコ)だった。

「異なる世界？」

普段は完全に眠っている鷹(ファルーコ)の声に、ミカツチさんだけでなく俺たちも驚く。そして、その内容に改めて驚く。

「異なる世界って、アーちゃん、どういう事？」

キヨカが左手の蜘蛛(アラネーオ)に訊く。

「鷹(ファルーコ)の言葉通り 声は 異なる世界のもの、

異なる世界——ここじゃない世界。

その世界から、助けを求める声。

「……って、それって、かなりヤバいんじゃないのか？」

「そうだよ。助けを求めてたよ。早く行かないと、蟲(ベステート)に食べられちゃうよ」

「そうだ、食べられ……って、蟲(ベステート)って人間を食べるのか？」

「そんなの知らないよ。でも、人間じゃないかもしれないじゃない」

「そ、そうだな」

そうだった。人間の世界だけとは限らないんだよな。

だけど、蟲(ベステート)に食べられるって感覚がよくわからない。

「ファイ様、シータ様、すぐに出立の準備を」

「そ、そうだね。早く行かないと」

修行をしようってとこだったが、それどころじゃない。こっちの方が重要だ。

「あ、ああ。でも、どの世界かわかるのか？ っていうか、行けるのか？」

俺たちは、行きたい世界に行く事はできない。

「アーちゃん、行けそう？」

唯一、蜘蛛(アラネーオ)は蟲(ベステート)がいる世界に移動する事ができる。

可能、

「よし、だったら行くしかないだろ」

修行のためとはいえ、この世界に長くいすぎたかもしれない。本当なら、蟲(ベステート)を封印して風伯を打ち直してもらった時点で、移動しておくべきだったかもしれない。

だけど、それだと結局、新しい風伯や嵐帥を使いこなせなくて、苦労しただけかもしれないけど。

まあ、急がば回れって言うじゃないか。そういう事にしておこうぜ。

だけど、それもある程度形になった。だったら、今なら世界を移動してもいいだろう。

「荷造り開始だよ」

「ああ」

キヨカに言われるまでもなく、俺たちは自分たちの荷物を取りに向かう。もっとも、荷物は常にまとめてあるので、たいして時間は掛からない。実際、すぐに終わってしまう。

俺たちはそれぞれの荷物を持って、外に出ていた。

「ファイ様、シータ様、お気を付けて」

並んだ俺たちに向かい合うようにして、ミカツチさんは深々と頭を下げる。

「ミカツチさん……」

突然の事だったせいもあり、実感がなかったが、これでミカツチさんとはお別れだ。おそらく、もう会う事はない。

それに気付くと、途端に淋しくなって涙がこぼれる。

「ファイ様、シータ様、涙をお拭き下さいませ」

ミカツチさんに言われて、涙を流している事に気付かされる。

「だって、淋しいもん。しょうがないよ」

「だよな」

「それに、ミカツチさんだって……」

「申し訳御座いません」

「謝る事じゃないですよ。やっぱり、淋しいものは淋しいもん」

俺たちは涙を流しながら笑う。

淋しくないはずがない。

俺たちは長く一緒にいて、これが当たり前で、楽しかった。それがなくなるのは、どうしても淋しい。

だけど、いつかは別れなければいけなかったんだ。それが今ってだけだ。むしろ、遅すぎるくらいだ。

「ミカツチさん、本当にありがとうございました」

俺は深々と頭を下げて、今までのお礼を言う。もちろん、これだけじゃ足りない。でも、俺にはこれくらいしかできない。

「ミカツチさん、本当に楽しかったです」

キヨカもお礼を言う。ぼたぼたと涙が地面に落ちる。

「ファイ様、シータ様、こちらこそ、充実した時間でした。お二人に出会えて、本当に感謝しております。こうする事が、失敗してしまった自分たちの役目と償いだったのだと思います」

「ミカツチさん」

キヨカがミカツチさんに抱きつく。

「私、まだここにいたいよ。もっと、ミカツチさんと一緒にいたい」

キヨカ……。

その気持ちは、俺にも痛いくらいわかる。

「シータ様……」

ミカツチさんは、受け止めたい気持ちを堪えているんだろう。ゆっくりと、キヨカを離していく。

「……ミカツチさん、ごめんなさい。私、私……」

キヨカだって、それはわかっているんだ。それでも、そうしたいと思った。俺だって、そうしたいくらいだもんな。

「ミカツチさん、俺たち、行ってきます」

シータの肩を叩く。

「う、うん。私たち、他の世界を救ってきますね」

「はい。御武運を」

俺たちは、精一杯の笑顔を向けあう。

これが今生(こんじょう)の別れだ。もう会う事はない。会わないんじゃないなくて、会えない。

キヨカもそれをわかってるだろうけど、気持ちを押し込めている……はずだ。

本当に長かった。

この国に長くいすぎて、昔からずっと住んでいるみたいだった。

そして、ミカツチさんと出会って、俺たちは楽しい時間を過ごせていた。

それが終わってしまう。

だからこそ、この別れがこなければと思っていた。

「シータ、頼む」

「あ、うん……」

キヨカは少し淋しそうに言う。まあ、淋しくないわけがないんだけど。

移動するために『時の口』を作ってもらわないといけない。

キヨカは目を閉じて念じると、目の前に『時の口』が出現する。

「これは……」

ミカツチさんにも見えているらしい。突然出現した『時の口』に驚いていた。

こうなれば、いよいよ本当にお別れだ。

少しでも引き延ばしたい。だけど、それはこれからの世界を苦しめる事になっている。

「それでは、本当にお世話になりました」

「本当に楽しかったです」

「お二人とも、これからも世界を救って下さい」

「そうだ。ミカツチさんから預かったものも、ちゃんと届けてみせます」

そうだった。俺たちは、ミカツチさんから預かりものをしてたんだ。

「はい。宜しくお願い致します」

「任せて下さい」

「それじゃ、師匠、ありがとうございました」

「あ、私も。ミカツチ師匠、ありがとうございました」

キヨカも慌てて挨拶をする。

「こちらこそ、充実した時を過ごさせて頂きました。お二人にお会い出来た事、感謝しております」

こちらこそ、とキヨカが返礼をする。



このままじゃ、キリがないな。

「それじゃ行くか」

「……うん」

キヨカはまだ名残惜しいみたいだ。俺も同じだけど。

それだけ長く一緒にいたんだよな。

「行ってきます」

これは別れじゃない。出発だ。自分にそう言い聞かせる。

「はい。行ってらっしゃいませ」

ミカツチさんが笑顔で見送ってくれる。

「行ってきます、ミカツチさん」

キヨカはブンブンと手を振る。

「行くぞ」

「うん」

俺たちは笑顔で旅立った。

たくさんの思い出という荷物を抱えて。

仮面の国

F i n o .

心の歌を奏でて 一仮面の国一 ㊦の㊦

<http://p.booklog.jp/book/108348>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108348>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108348>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ